

Events

トーク[オンライン配信]

「**アートのやわらかな社会実装**」

11月20日(日)公開

近年福祉や教育など、他分野との協働を積極的に行うアーティストたちの活動も増えており、アートが様々なかたちで社会化されています。児童福祉施設でのアートプロジェクトの経験もあるゲストを交えて、現代社会においてアートをどのように社会化することができるかを考えていきます。

登壇者: 碓井ゆい、青木彬 (「ファンタジア!ファンタジア!ー生き方がかたちになったまちー」ディレクター)

ゲスト: 堀内奈穂子 (NPO法人アーツインシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] / dearMe プロジェクト)

「ファンタジア!ファンタジア!ー生き方がかたちになったまちー」YouTubeチャンネルからご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/channel/UC4oUCidKj9gy-it88rwRew>

料金:無料



オープンディスカッション

「**創造的な地域福祉を目指して**」

11月26日(土) 14:00~15:30

興望館をはじめ、セツメント運動では人々がよりよく生きることを目指すなかで、文化が必要不可欠であったことが伺えます。専門化が進みそれぞれの分野で理論や実践が積み重なる一方で領域を横断することに難しさもある現在、異なる領域の人々がゆるやかに繋がっていく場が必要かもしれません。本イベントではアートと地域福祉の協働について、参加者の皆さんが感じている可能性や悩みについてディスカッションしていきます。

参加方法: 下記フォームよりお申し込みください。

<https://forms.gle/rMC7Hdx4xTZtkgLZ7>

料金:無料/要予約/先着順 定員:30名

会場:興望館 本館



こんな人にオススメです

- ・ケアとしてのアートについて興味がある
- ・地域福祉のなかで創造的な活動を展開したいと思っている
- ・アートプロジェクトの社会的評価を巡ってもやもやすことがある など



会場アクセス

興望館 別館

[所在地]
東京都墨田区京島 1-10-3

興望館からみて
向かい左側にある
白い建物です



興望館 別館



主催:東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、「隅田川 森羅万象 墨に夢」実行委員会、一般社団法人藝と共催:墨田区、社会福祉法人 興望館 協賛:株式会社東京鉄業、東武鉄道株式会社
 ※本プログラムは東京アートポイント計画の一環で開催しています。 ※「隅田川 森羅万象 墨に夢」実行委員会 事務局は(公財)墨田区文化振興財団が担っています。
 お問い合わせ:「ファンタジア!ファンタジア!ー生き方がかたちになったまちー」事務局 info@fantasiafantasia.jp
 ※イベント内容は変更になる場合がございます。 ※個人情報厳重に管理し、本事業の運営及びご案内のみに使用いたします。
 ※新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じて実施します。

ARTS COUNCIL TOKYO



共に在るところから

With People, Not For People



地域福祉と アートの繋がりを 考える展覧会

令和4(2022)年

11月5日~27日 [11/5土,6日,11金,12土,13日,18金,19土,20日,23水・祝,25金,26土,27日]

11:00~18:00 | 興望館 別館 (東京都墨田区京島1-10-3) | 入場無料

アーティスト
碓井ゆい

展覧会概要



地域の文化資源の活用を通じてまちを学びの場に見立てるアートプロジェクト「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」(通称:ファンファン)では、アーティストの碓井ゆいを招聘し、東京都墨田区で100年以上ものあいだ保育事業を営む興望館と共に、セツルメント運動と文化活動の接点を探るリサーチを続けてきました。今年度はこれまでの活動の成果発表として、興望館セツルメントの資料や碓井ゆいがリサーチから着想を得て制作した作品を発表する展覧会を開催します。

よりよく生きることを目指して福祉と文化が交わる

新型コロナウイルスの感染拡大をはじめ、近年の様々な社会の変化は、これまで私たちが当たり前だと思っていたことを考えなおさせる機会となりました。例えばパンデミック下において、エッセンシャルワーカーや家事育児を担っていた家族など、それぞれの生活を支えていた身近な存在が浮き彫りになったことは、一人ひとりが「生きること」を見つめ直すきっかけとなったのではないのでしょうか。大小様々な変化が起こる時代には、短絡的な答えばかりを求めず、矛盾や不確かさのなかでもじっくりと考え続ける忍耐力が必要となるかもしれません。そんな時、アートとは多様な視点が存在することを教えてくれるヒントになるものです。

しかし一方で、解決が急務となる社会課題があることも確かな事実です。そのような社会課題の解決を目指した地域福祉の歴史にセツルメント運動があります。近代化が進む19世紀、地域課題を改善するためにその地域へ住みながら住民の生活改善を目指したセツルメント運動では、必要最低限の生活の保証だけでなく、心身の健康を目指して福祉、医療、法律や文化が入り混じった多種多様なプログラムが展開されていました。

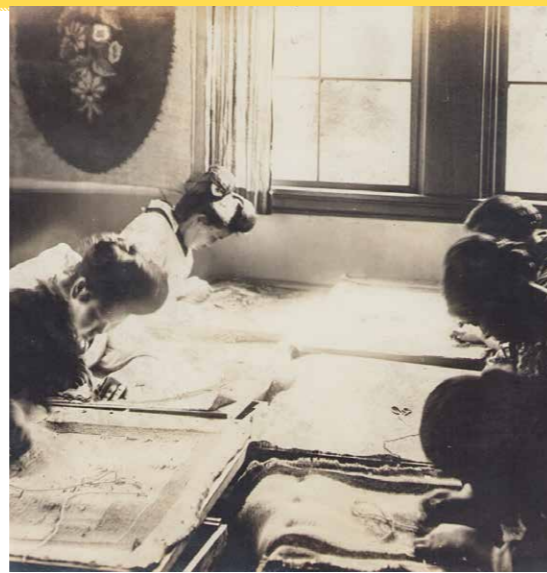
ファンファンでは、2021年から碓井ゆいと共に興望館に保存されていた保育日誌や写真資料のリサーチ、学童を利用する子供たちを対象としたワークショップを行ってきました。セツルメント運動とアートの繋がりを模索するなかで見えてきたものは、人々が「よりよく生きる」ことを目指すうえで、福祉もアートもひとつのグラデーションのなかに存在しているということです。

『共に在るところから/ With People, Not For People』では、セツルメント運動とアートを手がかりに、人々が地域のなかで「よりよく生きる」ためどのような創造的な実践が行えるか、その可能性を考えていきます。

「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」とは

墨東エリアを舞台に、2018年から始まった“学び”をテーマにしたアートプロジェクトです。この街に集まる人々とアーティストや研究者の対話を通して、墨東エリアを“学びの場”に見立て、豊かに生きる方法を探っています。他者との対話で生まれる気づきから、自分自身の想像の幅を広げ続け、自分のなかの常識や「当たり前」を解きほぐす小さな実験を仕掛けています。

<https://fantasiafantasia.jp/>



昭和7(1972)年 興望館での毛糸敷物製作の様子

セツルメントってなに?

私にとっては文化的・教育的社会事業という言葉がしっくりきます。私が身をおく興望館という場所は、福祉のみならず様々な分野の個性ある人と、時代や地域を超えて繋がることができます。一人ひとりがその人らしく生きられること。その実現のために地域、社会をともにつくる。そこにセツルメントの魅力が詰まっているのです。



萱村竜馬
社会福祉法人興望館
地域活動部施設長



こうほうかん 興望館とは

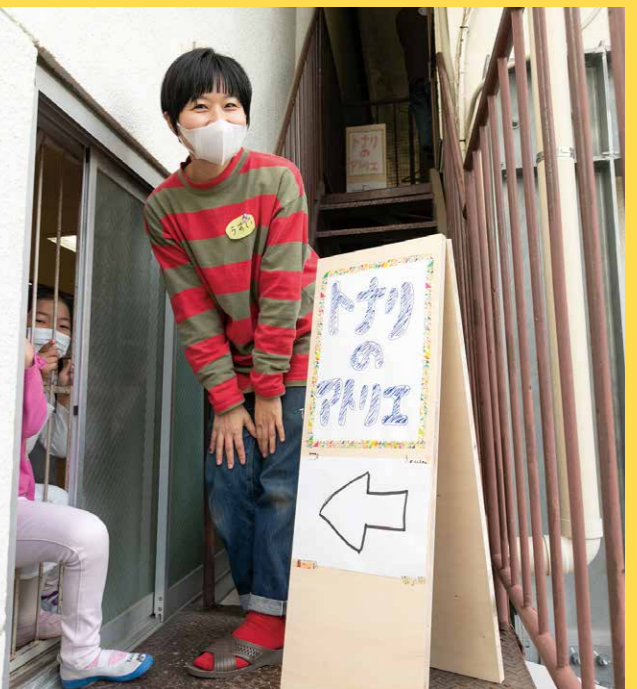
興望館は1919年(大正8年)、日本基督教婦人矯風会の有志による活動から生まれ、1923年(大正12年)の関東大震災、1945年(昭和20年)の東京大空襲を乗り越え、現在に至るまでその働きが引き継がれています。その興望館の100年を超える働きを理解することはその根底にあるセツルメントの魅力や関わった一人ひとりの存在を知ることと深くつながっています。



興望館 外観

アーティスト 碓井ゆいさんにインタビュー

碓井ゆいさんは、2021年度から約1年半、100年以上の歴史を持つ興望館の活動資料をリサーチし読み解きながら、ワークショップや作品制作を行ってきました。碓井さんが普段どんな活動をされているか、今回の企画ではどんなことを考えたのか、皆さんにお届けします!



碓井ゆい Yui Usui

1980年東京生まれ。手芸の技法を中心に、布をはじめとした身近な素材を用いて平面・立体作品を制作する。ジェンダーの不均衡さを突いた《shadow of a coin》(2013-2018)や《shadow work》(2012-2016)では、近代化の過程で女性が担うようになった家事を「見えない」労働/影の部分として浮き彫りにする。社会・文化・歴史に対し、女性や労働の視点を中心に様々な角度から読み解いていくことで作品制作に取り組み、関係性や批評を生み出していくという表現活動を実践する。2018年VOCA賞受賞。



これまでどんな活動をされてきましたか?

主に現代美術の領域でアーティストとして活動しています。身近な素材や手芸の技法を用いて立体作品や、空間全体を演出する作品を発表しています。

手法として、絵の具ではなく、布や糸を使用するのはなぜでしょうか?

祖母や母が手芸をしていたので身近なところに布や糸がありました。元々は大学で油絵を専攻していたのですが、制作に悩んでいた時に手芸用品を手に取り、作品としてではなく気晴らしにカーテンやTシャツなどの身近な布製品を作ったことがきっかけで手芸技法を作品にも取り入れるようになりました。

私は社会的な制度やジェンダーをテーマにした作品を制作することが多いのですが、手芸自体もハイアートと見做されなかったり、女性たちがするものなど社会的な構造のなかで様々なバイアスに晒されている技法であることも関心を持った理由のひとつです。

社会制度やジェンダーなどが作品のテーマとなったきっかけはなんですか?

東日本大震災の時に今までは自分には見えていなかった社会制度や歴史がたくさんあったことにショックを受けました。そして自分が疑問に思った制度や歴史について調べていくうち



に、今まで自分もややもやしていたことや勝手に思い込んでいた劣等感が、自分だけの問題ではなく社会構造の中にも大きな課題があることを知りました。こうした新しい視点を知るだけでも、私自身はすごく生きやすくなった実感があったんです。それから作品のテーマとして扱うようになりました。

興望館の活動について、どのように感じているか感想を聞かせてください。

100年以上に渡りその時代の地域課題のニーズに合わせて、すぐに行動に移してきた実行力が本当に素晴らしいと思います。私はつい頭で考えて立ち止まってしまうことが多いので、セツルメントのように社会に回答する即時性には学ぶべきことが多いなと思いました。

今回の展覧会で、鑑賞者に伝えたいこと、感じてほしいことは?

セツルメントについてリサーチをするなかで、「誰かのためではなく、同じ目線で行動していく」という理念があることを知り、とても共感しています。今の社会では様々なリスクや思い込みによって誰かに助けを求めるために声を上げることが、誰かを助けることですら躊躇してしまうことがある気がしています。でもセツルメントのように誰か思いやる精神は福祉という分野に限らずみんなが持つことだと思おうので、自分たちごととして展示を見てもらえたら嬉しいです。

